

シャンソンのアコーディオン

執筆者 前原克彦

♪シャンソンのアコーディオン第1回「アコーディオン弾き」その2(承前)♪

《これから数回にわたって、エディット・ピアフの絶唱「アコーディオン弾き」をみていきます。冒頭をまずご覧いただきましょう。ミシェル・エメの歌詞を翻訳引用します。》

街の女は美しく
向こうの街角に立つ
彼女には馴染みがいて
小金を稼がせてくれる
自分の仕事がすめば
今度は彼女が出かける番
ささやかな夢を見るために
場末のダンスホールへ
彼女の恋人はステージにいる
変わり者の小男
アコーディオン弾き
ジャヴァが弾ける (引用ここまで)



絵 藤森悠二 作

1947年生 東京都出身

洋画家

「関東アコーディオン演奏交流会

2006アコーディオンのある風景」より

セゴビア城

◎画像の複写・転写を禁止します。

《シャンソンの歌詞はクープレとルフランの3番構成》

ほかならぬピアフ自身がシャンソンを「3幕もののメロドラマ」と語っているように、レトロなシャンソンには物語があります。内容のあるシャンソンは歌詞を丁寧に味わうべきものです。そして、その歌詞が普通3番まであるので「3幕もののメロドラマ」となるのです。

1番から3番までの歌詞は、通常クープレとルフランの2部に別れています。一般に節と訳される前半のクープレが、物語の進行を担います。1番で男女が出会い、2番で結ばれ、3番で別れるというような感じの起承転結があります。クープレに続く後半では1番2番3番と同じ内容の歌詞が繰り返されます。この部分がルフラン(繰り返し、リフレイン)です。記憶に残る魅力的なメロディーや詩句を配したルフランは楽曲の核です。クープレが叙事的、ルフランが叙情的とも言えます。

「アコーディオン弾き」では1番で街の娼婦と恋人のアコーディオニストが紹介されました。次回は彼女がアコーディオンに酔いしれるルフランです。

(以下次号)